

# 地域子育てセンター「ゆりかもめ」の歴史 4

## ～ 「ゆりかもめ」の理念が見えてきた ～

### 4-1 戦後社会教育の理想を追う「地域子育て支援センター」

「ゆりかもめ本館」の他に「寺町分館」が出来るに当たって、私たちは、市から建設費用の補助を受けなかっただけでなく、運営費用の増額も求めなかった。が、永久に続くべき施設の維持費をどうするかは、額の多寡にかかわらず、慎重に考えられるべきことであった。建設費を負担してくれた愛染院に、維持費の負担まで求めることはできない、と園長宮崎は判断していた。

私は、利用者からのご喜捨を考えた。「福祉はただ」という常識をひっくり返してみようと思った。「ただは人の心もただにする。」「ゆりかもめ」のサービスを「有料にすることが、利用者の自尊心を高める」ことになるようにしてみようと考えた。自分たちの負担が、「ゆりかもめ」を支えているという認識、「ゆりかもめ」の運行のために自分たちが出来る負担、行動、思索を提供してもよいという理解。多額の負担は出来ないが、少々の負担と、智慧や労力の提供を通して、自分たちが受益者にも受益者にもなる快感。地域子育て支援センターとして「ゆりかもめ」が、戦後社会教育が掲げた理想（① 1人1人の日本人を、1人の成熟した市民として育てる。② 人と人とを繋ぐ。）を追求していく、その第一歩はこのようにして歩み出されたのだ。【偶然その 15】因みに、「ただ」は職員の内も油断させる。「どうせただでしょ。」というわけだ。が、金額の多寡に拘わらず、有料だったら、「お金を貰った以上は、それに見合うサービスを」と考えるのが人の心だ。それは職員にとっても一定の緊張を生み出す元になる、と私は考えた。

### 4-2 「ゆりかもめ」が街興し



「寺町分館」発足 1 年目の 11 月、「ゆりかもめ」が主宰する 7 回目の青空クラブ合同運動会が、潮浜公園に 500 名の親子・家族を集めて盛会裡に終わった。翌日、三橋が園長宮崎の事務所にやってきた。「運動会は大盛会で、主催者側の児童家庭課長さんも満足してお帰りになりました。」と言いながらその顔は、明らかにとまどいで一杯だった。とまどい信号が私に届いたと見て取った三橋は、やおら語り出した。「盛会でいいのですが、青空クラブの運動会

は、もう限界です。人が多すぎます。2 時間の競技時間があっても、それぞれの参加者が出場できるのは、5 分だけ。皆さん不満、不満で帰りました。」私は即座に答えた。「じゃあ止めればいい。止めていいよ。意味がない。」「止めちゃっていいんですか？」「いいよ。子ども祭りでもやればいい。」「どこで？総合福祉会館あたりでしょうか？」「違う。外でやろう。家の中はありきたりだ。木更津駅西口がガラガラだよ。あの辺でやろう。お寺さんもあるし。いんじゃないの。」2 人のこのような即興のやり取りから「木更津こどもまつり」は始められることになる。【偶然その 16】

### 4-3 「森の広場：かくれんぼの森」は、母達をこそ癒す

青空クラブ運動会が、町の中の「木更津こどもまつり」へ展開するかもしれない頃、2003（平成15）年11月、社会館保育園「森の家」を活用する「森の広場：かくれんぼの森」が開設された。開設されたキッカケは、既述の通りで、「寺町分館」が一杯になることが多くなっていたからだ。

「ゆりかもめ」開設の当初から、「青空クラブ」等の支援を続けていた木更津市主任児童委員会は、その独自企画で、母と子供達のための「焼き芋会」を年に1回実施していた。1回目は矢崎公園でやったのだが、すぐ周りから「公園で火を使うな。」というクレームが付けられた。「では自性院の観音堂前では如何ですか？」と宮崎が提案して、2回目から、焼き芋会を主任児童委員会が、自性院境内で実行してくれていた。【偶然その17】未だ自性院には十分な駐車場がなく、スーパー稲毛屋の駐車場を拝借するなど、すべて主任児童委員会が手配も段取りもしてくれた。青空クラブ参加の母達は、秋空の元で、我が子と食べる焼き芋の幸せの味をかみしめた。



「森の広場：かくれんぼの森」は、この「年に一度の焼き芋会」が、発展解消して、毎週開催されるイメージだったから、親たちは非常に興味を示した。子供の年齢制限が、3歳以上とされ、参加した母達は、「焼き芋会」のようにお客様（受け身）で済まない、自分たちも何かしなければならぬと知れると共に、利用人数は減っていった。しかし、その内容は、3000坪の自性院境内はもとより、その周辺の請西の里山が舞台とあって、自然の柔らかさ・開放性を良しとする方々

には、大変な魅力であった。ワンダーフォーゲル同好会の元ベテラン部員も含めて、野外炊事や畑仕事等お手のものの母達が「かくれんぼの森」をリードしてくれた。特に、公園では出来ない焚き火が、いつでも出来るのが、「焚き火セラピー」を楽しみ「癒されること」を求める人々を引きつけて止まなかった。

### 4-4 「ゆりかもめ」の流儀が、根を張り枝を伸ばす



「寺町分館」のスタートに当たって、「ゆりかもめ」は、先ず何よりも「寺町分館」の「親子が集う広場」を従来の「青空クラブ」と同等の重点事業として重視した。いつでも気が向いた時に行ける「室内の集いの広場」。母達と子供達の気持ちが安らぎ、ほぐれ、その気持ちを溢れ出させることが出来る場。ちょっと高級で、上品で、知的で、でも指導員達は余り押しつけがましくなく、緊張なくてよい穏やかな空気。子供と2人の密室

から、抜け出すルートができる解放感が、母達を一息付かせる。子供と2人の孤独感が、愚痴を聞いてもらえるお友達を得て消えていく。いつの間にか、年間延べ1万5千人の親子達がやってくる、町の中の広場になっていた。

「指導員達があそこにいる」と分かる「寺町分館」の存在は、電話相談の件数を増やした。電話番号だけが頼りの電話相談ではない、相談相手の顔も場所も分かって、母達は安心して相談できるようになった、と私たちは受け止めた。

「ゆりかもめ」が社会館保育園から外に出たことによるマイナス面も見えてきた。ミニオフ・育児講座に集まる母達の楽しみの1つ、「保育園の子供達はどんな風かしら？」という関心が満たされなくなったのだ。

現在ミニオフ1コース5回のうち必ず1回は、保育園の乳児室見学とされているのはその対策である。保育園の赤ちゃん達の食欲の旺盛さ、食事態度の自立振りはいつも母達を驚かせる事柄だ。

色々な切り口を用意して、母子の孤立を減らし、母親達の悩み苦境を軽減しながら、指導員達は、親たち同士の会話、情報交換、相互支援を推奨し続けた。助けて貰った親たちが、次には後輩の母達を励まし支えていくといった循環が、しっかりと「ゆりかもめ」の流儀として出来上がって来た頃、2004（平成16）年5月「木更津こどもまつり」の開催予定が、公式に提案発表された。